

最初の一歩

名前の残らない、小さな一歩の物語



作 てらいしじゅんこ

ある町に、人と人のあいだにある「小さな扉」を見つけるのが得意な女の子がいました。

女の子には、扉の向こうに何があるのかまでは分かりません。

ただ、ときどき胸の奥で、

「あの人と、この人が出会ったらいいのに」

「あの子は、きっとあの場所へ行ったほうがいい」

そんな小さな声がするのです。



ある日、女の子は、絵を描くことが好きなのに、誰にも見せたことのない少年に出会いました。

女の子は言いました。

「丘の上に、小さな画廊があるよ。一度、絵を持って行ってみたら？」

少年は首を横に振りました。

「ぼくの絵なんて、誰も見たくないよ」

けれど女の子は、なぜだかもう一度だけ言いました。

「ううん。行ったほうがいいよ」

